
模倣者

針井 龍郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

模倣者

【Nコード】

N2139L

【作者名】

針井 龍郎

【あらすじ】

日常に紛れ込む、非日常。気づいたとき、あなたは どうしますか？

「あのさ。髪の毛ピンクにしてみたら、どんな感じになるかな」
隣のテーブルから聞こえた声に、俺は思わず視線を向けた。

時刻は正午を僅かばかり過ぎたぐらい。大学構内にある生協食堂で、俺はいつも通り昼食をとっていた。

特に普段と変わったことのない平凡な日常が、今日もだらだらと過ぎていた。変わったことといえば、食堂が普段よりも混んでいるという事くらいだ。雨が降っているせいか、今日はどこもかしこも満席状態。あたり一面黒い頭ばかりが、まるで団子のようにひしめき合っている。だが、それだけだ。非日常的な要素なんて、何一つありやしない。

それだけに、『髪の毛をピンクにする』だという突飛な発言が、俺の注意をひきつけたのだ。

だが、俺の想像をあざ笑うかのように、本人の容姿は話の内容とは正反対とも言えるほどだった。

化粧つ気もあまり感じさせない、縁なしメガネを掛けた姿は、真面目そうな文学少女的イメージ。背中の中頃まで伸ばした髪の毛は、染色さえ施したことがないと思われる、緑髪という言葉が相応しいほど艶やかな黒髪。向かいに座っている女学生も、彼女とよく似た雰囲気を持つ女性である。

そんな彼女たちには似合わない発言の出どころを、しかし俺は何となく知ることになった。

要するに、居たのである。実際に髪の毛を真っピンクに染めた、ド派手な服装の女性が。テーブルを一つ挟んだ向かい側の席だった。パステルカラーの髪の毛ともなれば、嫌でも視界に入るだろう。なるほど、彼女の髪を見て先ほどの言葉が出たというのなら、頷ける。

だが、次に続いた会話を聞いて、その仮説も壊れてしまった。

「でもね、ピンクって派手すぎないかな？ もう少しおとなしめの色にした方が、私は良いと思うんだけどな」

「そうかな、私はこっちの方が良いと思うけどさ。周りが暗い色だから、控えめにすると目立たないと思うんだ。彼女は何としても目立たせないと」

……なるほど、そう言うことか。さっきの話、別に彼女たち自身の髪の毛の事を言ってた訳ではないらしい。

熱心に話し込む二人の間に積んである紙の束。首を伸ばして覗き込むと、色鮮やかなイラストが紙一面に描かれていたのがチラリと見えた。その中には、確かにピンクの髪の毛をした女の子もいた。

察するに、ピンクの女の子がヒロインの漫画でも描いているのだろう。うん、おそらく間違いないはずだ。

「じゃさ、彼氏は少し落ち着いた印象でも良いよね？」

「あ、確かに！」

「じゃあさ、こんなのはどうかな？ 身長は平均より低めで、優男で、黒いジャケットに白いシャツ……」

指折り数えていく設定を、相方の女の子がデッサン画にしていく。数秒後には、一人の男性のイラストが出来上がっていた。

そう言えば、ヒロインのピンク髪の娘はモデルがいた。だとすれば、もしかして彼氏役にもモデルになった人物が居るのでは……？

うん、予想通り。設定そのものと言っても過言ではないほどの人物が、食堂の入り口の方に立っていた。気をつけていないと見過ごしかねない程目立たない男性だったが、あの茶色がかった癖毛は間違いようもない。服装も見事に一致している。

そう言えば聞いたことがある。小説家は自分の作品に登場する人物像を、実在の人間のイメージから拝借する事があるのだ、と。彼女たちは、今まさに同じ事をやっているのだろう。

——おもしろいな。

漫画の制作過程なんて、なかなか興味深いじゃないか。もう少し詳しく話を聞いてみよう、平静を装いつつも俺は耳をそばだてた。

「ところで、この部分なんだけどさ……」

話題の中心は、何時しかストーリーへと移っていた。

なんだ、人物設定はもう終わったのか。もしかしたら、俺がモデルの人物も出てくるかと思ってたのに、残念だよ。もう少し目立つ格好でも、してくれば良かったかなあ。

「ここで、この女の子が出てくるんだけどさ、今の展開だと全く必要ないよね？」

……なんだ、人物を減らす相談でもしてるのか？ 確かに、考えてみたらその通りかもな。増やすばかりじゃ、物語もパンクしてしまうだろうしな。

呑気に考えていた俺だったが――

「そうだね、仕方ないよ。その娘はストーリーから消しておこう」そのセリフと共に、一つ向こうのテーブルに座っていた女の子が消えた。その光景を見て、俺の思考は現実に取り戻された。

確かに俺は見た。立ち上がったどこかに行った訳でもない。まるで誰かにかき消されたかのように、居なくなってしまったのだ。

どういう事だろう、これは……。

考えている間も、彼女たちの会話は進んでいく。

「そしたらね、こっちの男の子も要らないんじゃないかな」

「あ、本当だ。名前だけしか出てこないもんね、居てなくてもおんなじだ」

その瞬間、右隣に座っていた男子学生が、先ほど同じように消えた。跡形もなく、初めから存在していなかったかのように。

俺の背筋を、冷たいモノが流れ落ちた。すぐにここから逃げよう。本能が警鐘を鳴らす。これ以上、このことについて考えてはダメな気がする……！

しかし、そうは思っても、頭は勝手に考えてしまう。

もしかしたら彼女たちは――

「あ、こんな所で勝手に真相に気づいちゃう子が出てきたよ」

周りを真似ているんじゃないよ――

「本当だ。これじゃ、話にならないよ」

むしろ周りが彼女たちを――

「仕方ないね」

「――この子には、消えてもらおう」

（後書き）

こちらの手違いで、正しく投稿出来ていませんでした。

企画小説にもかかわらずミスを犯してしまったこと、深くお詫び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139/>

模倣者

2010年10月8日15時12分発行